

連載
第50回

福聚山史

池浦 泰憲 文
及川 一晋 編

淀橋浄水場

東京の「近代水道」その二

○淀橋町と浄水場

近代水道の整備における行政区画と水道を巡る問題は、淀橋浄水場の目前においても存在した。実は操業を開始した明治三十一年から大正六年（一九一七）まで、一滴の水もその浄水場が立地する淀橋町には供給されていなかったのである。淀橋浄水場が立地する東京府豊多摩郡淀橋町は、当時の水道条例に基づき、東京府下ではあるが「東京市」ではなかったため、その給水区域となっていないであった。したがって、淀橋町の住民は、「目の前に浄水を控えながら一掃も飲ませてもらえない！」（大正十二年七月二十八日「読売新聞」記事）とあるように、多くの浄水を湛える施設を目の前にしながら、水質の悪い井戸水等に頼らざるをえない生活を送っていたのである。

○淀橋町としての努力

浄水場を目前にしながらその水を使うことができない。そうした状況が続く中、大正八年頃より淀橋町で上下水道布設の要望が高まり、淀橋浄水場からの分譲水を水源とする町営水道計画が立てられたが、当時の町財政ではその負担に耐えないということでは中止になったという。

しかし、大正十一年（一九二二）四月に、

町が児童の飲料水検査を行った結果、その水質が極めて不良で、衛生上放置できないという理由で水道布設が決定した。その手始めとして、町内の小学校と沿道消火栓の給水の認可を申請し、大正十二年九月の関東大震災をはさみつつも、段階的にその工事が進められ、昭和六年（一九三一）三月、全工事が完了した。これにより、淀橋町内において、三七四五戸が水道を使用（昭和五年九月当時）する事ができるようになったといい、昭和七年三月時点では、町内の人口約六万人の内、給水人口が約二万二千人ほどになったという。

○当時の水道料金はいくら？

こうしてようやく淀橋町にも浄水場の水が給水されることとなったが、そのための負担はどのくらいであったのだろうか。当時の水道料金は、一カ月十m（一mはリットル）までの使用で一円五十銭であったという。（大正時代の頃、一日一人あたりの水の使用料は約百二十リットルともいわれている。）ちなみに、昭和初期の物価は、米十kg＝三円二十銭、コーヒー一杯＝十銭、映画館入場料＝三十銭、ビール大瓶一本＝四十二銭、公務員初任給が七十五円ほどの時代であった。

○浄水場の移転計画

昭和四十年三月三十一日、移転に伴って閉鎖した淀橋浄水場であるが、実は、竣工（明治四十四年）から半世紀もたない大正末期からその移転について公に議論がなされていた。その理由は、地元である新宿の街としての発展に障害となるという背景によるもので

あった。

浄水場が建設された当時、新宿付近はいわゆる東京市近郊の農村地帯であった。ところが、大正末期に入ると、新宿は銀座と並ぶほどの大商業地、盛り場として発展してゆく。本来、新宿は東京市郊外の地であったが、明治以降、東京市域の人口の急激な増加の結果、新宿のような隣接する周辺郊外地域へ人口が移っていくこととなった。こうした中、隣接する五郡八十二市町村が、昭和七年（一九三二）十月一日、東京市へと編入され、淀橋町は淀橋区として新しい二十区の一つとなった。このことは水道においても、それまでの市と区別された形での給水から東京市として一元化されることとなり、具体的には水道料金の減額などをもたらしたのである。また、新宿は江戸時代から甲州街道、青梅街道の宿場町であったが、そうした交通の要所として、明治以降、山手線、中央線、京王線、市電など、東京市と郊外を結ぶ交通機関の要所として新たに位置づけられ、街の発展を促したという。さらには、関東大震災により東京市域に大きな被害が及んだ一方で、郊外の新宿は比較的被害が軽微であったということも、より商業地としての新宿の発展を維持、促進する要因となったという。このような新宿の発展の中で、淀橋町の七十三万余坪の内、約十万坪の広大な土地を占め、さらにその中心である新宿駅に近接する淀橋浄水場の移転を求める声

が持ち上がったのである。

○戦後の移転まで役割を果たす

この時の移転問題は、結局見送りとなったが、先に触れた東京市が拡張された昭和七年にも起こっており、特に浄水場が近接する新宿駅西口付近の鉄道、道路の路線改良計画が、浄水場の移転を前提として立案されている。

これに伴い、移転に向けての具体案も練られた。ちなみに浄水場の移転は地元民からの要望が強かったというが、その要望に浄水場跡地に高層建築物の建設を反対する意見が盛り込まれており、戦後の副都心計画と全く相反するものであった。

淀橋町のほか新宿に生活する人々に水を供給する存在のほかが、街の発展の障害となるとして移転を求められるという、矛盾した状況におかれてきた浄水場であったが、その計画は日本が戦争に向けて動き出すのに伴って白紙化されていた。やはり毎日の市民生活のなくてはならない存在である浄水場を、容易に移転することはできなかったであろう。そして戦争は浄水場にとっても大きな危機であった。特に昭和二十年（一九四五）五月二十五日～二十六日の空襲では、浄水場の事務所や原水ポンプなどが焼失したという。幸い浄水、送水施設の被害が少なかったため配水量が一時五十%まで減少しただけで済んだというが、戦後、施設の改良を重ねつつ「新宿副都心計画」が具体化、実行される昭和四十年まで浄水場はその機能を果たし、新宿とともに歩んできたのである。

（参考文献『西新宿物語』、『淀橋浄水場史』）



西新宿住友ビルの北側広場に残るバルブ。浄水場で使用されていた。